

## 私の趣味

# 年越しスカイダイビング

株式会社 日水コン／代表取締役会長  
(元 公益社団法人 全国上下水道コンサルタント協会／会長)

野村喜一



4000m上空のセスナ機から身体を出した瞬間に猛烈な風を感じる。気圧は地上の半分、気温はマイナス30度、地上は遥か下、そんな状況下で飛行機から飛び出す。その瞬間の気持ちを味わいたくて、7年前から年の暮れにスカイダイビングを楽しむようになった。

スカイダイビングは年に一度で、時期は12月末と決めている。この時期、関東平野は晴れの日が多く、空気も澄んでいる。また一年の終わりを締めくくる意味もある。

飛び出す瞬間の、「ままよ」というか、「死んでも仕方ない」という気持ちが癖になる。一瞬だが「全てを断ち切った」という爽快感が何とも心地よい。勿論、飛び出す瞬間には、そうした爽快感は無いが、パラグライダーが開き「ゆらゆら」と空中を舞っている時に、それを感じる。関東平野の360度の眺望、富士山を含む遠くの山々、スカイツリー、下を見れば荒川やビル・家屋などの生活の場が目飛び込んでくる。

自由落下をしている時間は40秒程で、パラグライダーが開いてから地上までは5分程かかる。この5分間こそが至福の時間となる。40秒間も楽しい時間なのだが、顔面への強い風と摩擦音で、考えるような状況ではない。その後の静かで穏やかな時間こそが素晴らしく、どれだけ続いても良いと思える程の時間だと言いつける。

今回の飛行では、3人の若い女性が一緒だった。彼女達の背後には落下を操作する男性が腹を彼女達の背中にピタリと縛り付け一体化し、映像を撮る別の男性と二人で、一人の女性をサポートすることになる。結果、3人の女性に6人の男性が必要となる。友人と私の二人には、背後の男性だけだから、合計13人の飛行となった。

地上に降り立ち、着地点から荷物が置いてある建物に向かう車の中で、彼女達の興奮した話を聴いていると、こちらも楽しくなる。彼女達には生涯の思い出になる出来事だろうし、落下中の映像をたぶん自分の子供達に見せて語るのだろうなどと想像したからかもしれない。何しろ、経験しなければ決して語れない体験なのだから。



70歳を過ぎて何故のスカイダイビングなのかと、常識的には言われるかもしれない。だがこれには経緯がある。

私が連れ合いを亡くしてから3年の間、彼女の「死」を受け入れることができず、体重も6キロ以上落ちてしまった。仕事は何とかやっていたが、プライベートな時間は全くダメで腑抜けな私を見ていた友人が随分と気遣ってくれた。彼はまず私を旅行に誘ってくれた。紅葉の白神山地、空海の高野山の旅は、心和む時間だった。しかし心が騒ぐことは無かった。前向きで「やってやろう」というような、積極的な自分を見つけることはできなかった。

そんな私を見て彼は、スカイダイビングとゴーカートに誘ってくれた。スカイダイビングに関しては、前述のとおりだが、ゴーカートはスカイダイビング以上に心が騒いだ。ゴーカートは決められたコースを10周し、その周回の中で3回以上既定の時間を上回れば初級のライセンスが貰える。最初の10周はタイムオーバーでダメだったが、次の10周では友人と共に既定のタイムを切ることでできめでたくライセンスを得た。

ゴーカートの運営者から、60歳を過ぎて始めた人で、初回で規定のタイムを切った人はこれまでにいなかったと聞かされた。友人も私も車好きだから、一定のテクニックはあったのかもしれない。しかし私達より若い30代～40代の6人程の人達がタイムを切れずにいたのを見ていたので、それなりの優越感を味わうことができた。

このゴーカートも趣味にしていたのだが、昨年からは止めることにした。その訳だが、余りにも私の運転が荒く、何度もスポンジの壁に激突し、最後にはそのスポンジの壁を超えるような運転をしてしまったためだ。それを見ていた友人から、「危なくて見ていられないから、もう君は止める」と忠告された。また、ゴーカートに乗ると、動悸が激しくなる。走る前に車に乗っただけで脈拍が100近くにまで上がる。普段の私の脈拍は60程度だから、相当な緊張感があるのだと思う。20周を走り終わると、脈拍は120程度を打つ。この興奮はその後も続き、就寝し



でも普段の脈拍に戻ることはない。

危険運転と激しい動悸。こうした背景もあり、ゴーカートはきっぱりと止めた。そうすると、興奮する趣味はスカイダイビングしか残らない。もちろん、八丈島の釣りも大好きで毎年一回は行っているが、道具も持たず人任せなので、趣味とは言えない。

釣りの興奮とゴーカートやスカイダイビングのそれとでは、興奮の質が違う。だからこそ、スカイダイビングは前向きな自分を確認するためにも続けるしかない。スカイダイビングは危険も少なく(死亡事故はあるものの、初心者のテクニック不足か悪天候下のダイビングのみ)脈拍が上がることもない。

友人はスカイダイビングでも脈拍は上がるというが、私は初回のダイビングから脈拍はほとんど上がらなかった。高いところが好きなのか、バカなのかは分からないが、何故か脈拍は上がらない。友人が「嘘だろう」と言っていて、落下した直後の私の脈拍を測ったが、70程度の脈拍で多少の興奮がある程度のレベルだった。友人は私に付き合ってくれただけで、スカイダイビングは本質的に好きではないらしく、高血圧もあり昨年限りで止めることになった。この7年間、文句一つ言わず付き合ってくれた彼は、本当に優しく、いい奴だ。

世間でよく聞く話だが、「生涯に一人の好きな人と、一人の親友と、一冊の好きな本に出会えれば、それで人生は幸せだ」という格言がある。正に、彼は親友と言える存在だ。彼がダイビングに参加しないことを知った私の気落ちした態度を見て取り、自分の息子を参加させると代案を出してくれた。ここまでの気遣いがある彼は、真に生涯の友と言えるだろう。

ところで70歳を過ぎて「スカイダイビングはないだろう」と他者からよく言われる。スカイダイビングと言うと、命に関わる遊びと思われてしまう節があるが、私にとっては血圧も正常で健康面では何の異常も無く、ましてや脈拍も上がらない程度の「お遊び」である。

この行為、即ち「遊び」は全てが自己責任なのだから、他者からの意見はほどほどに聞けば良いと思っている。他者に迷惑を掛けない以上、遊びはしよせん「自己責任」であり、もしそれにより自分が怪我をして他者に迷惑を掛けるような事態になったら、その時は、敢えて非難を引き受ける覚悟はできている。遊びがなければ、生きている意味さえ薄れてしまう。

私は普段、社会的立場においてこの「自己責任」という言葉を使うことはほとんどない。なぜならこの言葉は、責任ある者達の言い訳としか思っていないからである。「自己責任」という言葉には、ある事柄の責任を社会的なつながりを無視して特定の個人に勝手に任せてしまい、自分はそれには関知しないという、換言すれば「責任放棄」のイメージがある。したがって、社会との関係性が強い事柄には「自己責任」という言葉は安易に使うべきでは

ないが、趣味のような個人的な世界は社会とは無縁で、個々人の生き方の問題だと捉えていたので、「自己責任」という言葉を使っても問題がなく、例えばスカイダイビングの様な趣味の分野においても、「何が起ころうとも全ては己の責任だ」と言い切れる道理になる、とっていた。

だが、よくよく考えてみると、絵画や演劇の世界では、素人の趣味と言いつつ玄人はだしの人たちがいて、その作品を鑑賞したとき、自分の心が動かされるというか、感動を与えられることがある。プロの世界であればそれは当然なのだが、こうした人達の中にも、そういったレベルにたどり着く人は少なからずいる。そういう人は趣味が高じてプロになり、他者に感動を与えるほどに成長していくこともあるだろう。人の心を楽しくさせたり、感動さへ与えるレベルにまで上り詰めた人達は社会性も備え、文化伝承の役割を担うことにもなる。だからこそ、世の中ではそうした活動に補助金を出し、人材の発掘にも努めている。

すると趣味と文化活動との線引きに意味があるのか、という問題が生じる。スカイダイビングでさえ、プロレベルのテクニックであれば伝承すべきものなのだから、趣味の域を越えることもある。要は、その行為が他者に何かを与えられる、または習得したものがなんらかの影響を他者に伝えられるかが問われるのだろう。そうなれば個人と他者とのつながりが生まれ、「社会性」が顕在化する。自己責任の域を越えて「公的責任」を持つ立場となる可能性もある。

趣味の話から脱線して、私的責任と公的責任論にまでなってしまった。あまり深くは考えず、趣味はあくまでも私的なことであり、個々人の楽しみと割り切っておく方が無難なようだ。

本文は、もともと趣味のスカイダイビングの楽しさを語りたくて書いてきた。その楽しさの本質は、「己の気持ちをふっ切る」ことが手軽にできることにある。だからこそ、一年の垢を落とすのに最適なスポーツなのだ。

最後に、趣味は年齢、さらには置かれた環境と共に変化していくものだと実感している。その昔は、趣味はゴルフと言ってきたが、それがゴーカートになり、今では酒とスカイダイビングだけになってしまった。スカイダイビングが生涯続くとは思えない。すると、残る趣味は50年以上日々付き合ってきた酒ということになりそうだが、つい最近、「赤ワイン」の味の深みを知る機会があった。半世紀ほぼ毎日酒を飲んでいたのに、新しい出会いがあったことに新鮮な驚きと静かな興奮を覚えた。最後の趣味が酒であれば、残りのわが人生も楽しく過ごせそうだ。

